モーターエクスプレス

ライダー 星野一義 50年の夢実現

2017モータースポーツファン感謝デー

第1日 4日 鈴鹿サーキット(三重県)
ペン＝田村尚之、鈴木伸夫、佐藤洋美
カメラ＝多賀まりお

RC166で至福デモラン「ホンダさん、ありがとう！」

インパルの星野一義監督(69)が中学2年生のころに抱いた50年来の夢を実現。レースを始めるきっかけになったホンダの2輪レース車両「RC166」のデモランを行い、少年のようにはしゃぎまくった。また、鈴鹿を運営するモビリティランドは、来夏に新しいレース「第47回サマーエンデュランス『鈴鹿10時間耐久レース』(仮称)」の開催を発表した。(観衆＝2万6500人)

バイク少年に戻る

50年の時を超えたマシンが、爆音をとどろかして鈴鹿を駆け抜ける。乗り込むのは、当時を思わせる真っ黒な革つなぎに身を包んだ星野。排気量250ccながら6気筒エンジンを搭載するRC166のアクセルを開け続けた。

「本当に素晴らしい。ずっと追い掛けてきた夢だった。ホンダさん、このチャンスをありがとう！ このままマン島に出ます!!」

たった2周のデモランだったが、バイクを降りた星野の興奮は収まらない。雑誌を読みあさり、世界を相手に戦うホンダの活躍をつぶさに見ていた少年時代を思い出し、至福の時を過ごした。

日本最速男の原点

星野がレーサーを志したのは静岡県の片田舎に暮らす中学2年のとき。この日、ともに走った高橋国光さん、北野元さんらが世界と戦う姿に刺激されたという。すぐにホンダのバイクを買ってもらい、近くの河原で練習に明け暮れた。「近所の人からは、『星野の息子が道じゃないところを走っている』とばかにされてねぇ」。頭の中はホンダのライダーになることでいっぱいだった。

その後、高校を中退してカワサキのモトクロスチーム入りを果たし、王者を獲得して4輪の日産自動車入り。憧れていたホンダではなかったが、「日本一速い男」と呼ばれて大成功。2002年に引退してからは自ら興した「インパル」を日本を代表するチームに育て上げた。

「宗一郎はすごい」

「本田宗一郎(ホンダ創業者)はすごい人だよ。50年以上も前に世界へ打って出て、鈴鹿サーキットも作っちゃうんだよ。当時は相当批判されたと思うけど、今となったらねぇ～。俺も宗一郎さんをまねてビジネス(チーム運営)をしてきた」。現役時代に立ち上げたチームは日産との関係が強いが、お手本はホンダの創業者だった。

「RC(ホンダ製2輪レーサーの型式)は憧れだった。今日は晴れ舞台。かみさんも連れてきたよ」。珍しく由紀子夫人を呼び、仲間に囲まれた星野。バイク少年の笑顔が輝いていた。

RC166にまたがり、うれしそうな星野監督㊥。先輩の高橋国光さん㊧、北野元さん㊨とともに鈴鹿を走った

モータースポーツ速報 iモード アクセス手順 iMenu→メニューリスト→スポーツ→モータースポーツ→トーチュウF1 ex